

テムジンとオン・カン
—チンギス・カンの前半生 その6—

Temujin and Ong Qan
—Former half-life of Chinggis Qan No.6—

2020年7月14日 改訂1版

Jul.14,2020 revision 1st

安田公男

Kimio Yasuda

URL : chinggis-ff

はじめに

テムジンはモンゴル部族の半数を占めるキヤト氏族のカンとなった。その直後、タタル部族の一派を金軍が追ってきたのでケレイト部族長トオリルと共に討伐した。この事件は金史により 1196年と分かり、テムジンの活動の年次が明らかになる最初の事件である。ここからテムジンとトオリル共同の他部族攻撃が活発になって来る。その最初は、キジル・バンにいたブイルク・カンへの侵攻であり、各史書で年次が明らかになる 1202年から逆算して 1199年の事で間違いないだろう。だが、それまでの事や亡命していたトオリルが再び帰ってきてカン位に復帰する事情がはっきりしないので考察して見たい。

1. 史書の比較

1.1 元史

番号		記事内容(抄)
1	1196 春	セチェとタイチュは妻子と共に逃れた。数ヶ月後テレトの狭間で殺した。
2		オン・カンの弟のジャア・カンボが来帰した。
3		(ケレイト部族の歴史とトオリルとモンゴルの関係の記述あり)。オン・カンは弟に追われて三国を経て困窮した状態で帰って来たのをテムジンが助けた。二人はトーラ河で父子の契りを交わした。
4		ムナチャ山にメルキト部族のトトと戦って勝った。奪った資財をオン・カンに贈った。このお陰でオン・カンに衆が集まった。
5		しばらくして、オン・カンは戦力が充実したので、テムジンに告げずメルキトを攻めトトをバルグジンに追いやった。資財家畜を奪ったがテムジンには何も与えなかった。
6	1199	ナイマンのブイルク・カンを攻めるために、トオリルと共にキジルバシの野に侵攻した。

1.2 集史

番号		記事内容(抄)
1	1194?	ジュルキン部を攻めた。セチェとタイチュは妻子と共に逃走した。
2	1194?	直ぐに、オン・カンの弟ジャア・カンボを攻めに行った。分裂していたドンカイト部を収め、オン・カンの元に送った。
3		(ケレイト部族の歴史とトオリルとモンゴルの関係の記述あり)。
4	1196 春 秋	トオリルが三国を経て困窮して帰ってきたので、テムジンが助けた。カラウン・カプチャル(黒林)でオン・カンと親子の誓いをした。
5	1197 春	オン・カンとジュルキン部残党の征討を行った。一部は逃げたのでテレトの狭間に追いついてセチェとタイチュを捕らえた。
6	1197	メルキトに兵を進め、カラス・ムラスで戦った。ムナチャ地方で、ウドイト・メルキト人を打ち破った。奪った資財を全部オン・カンに与えた。
7	1198	オン・カンの力は強くなりテムジンに相談無くメルキトを攻めブウラ・ケールで破った。トクタの息子トクスベキを殺し二人の娘らを捕えた。トクタイ・ベキはバルグジンに逃げた。奪ったものは何もテムジンに与えなかった。
8	1199	ナイマンのブイルク・カンを攻めるために、トオリルと共にキジルバシの野に侵攻した。

1. 3 元聖武親征録

番号		記事内容(抄)
1	1196 春	ハレント澤にいた我が衆がナイマンに襲われた。テムジンは兵を發しドイバン山に至りユルキンを下した。セチュとタイチュは妻子と共に逃れた。
2		タトラの野に居たとき、オン・カンの弟ジャア・カンボが来帰した。たまたまメルキト部と開戦になり、ジャア・カンボと共に戦い破った。トゥマン、シボイなどのケレイト敗散の衆が来降した。
3		(ケレイト部族の歴史とトオリルとモンゴルの関係の記述あり)。
4		オン・カンは三国を経て困窮してクセグル澤までやって来た。テムジンは迎えを出し助けた。後の秋、トーラ河の黒林で父子の誓いをした。
5	1196 冬	この年の冬、先に脱走したセチュ、タイチュをテレトの狭間に迫り滅した。
6	1197 秋	次年秋、ハラハ河に出兵し、メルキトの首領トトとムナチャ山に戦い、ウドイ、メリキ二部を下し、衆を収めた。獲得物資を全てオン・カンに与えたので、やや衆が集まった。
7		オン・カンはテムジンに告げずメルキトに侵攻し、ウラ河に至った。トトの子トギスベキを殺し、クトタイ、チャルンを捕らえた。トトのカトンや子を捕らえた。だがオン・カンは奪った物を少しもテムジンに与えなかった。トトはバルグジンに逃げた。
8	1199	ナイマンのブイルク・カンを攻めるために、トオリルと共にキジルバシの野に侵攻した。

1. 4 元朝秘史

番号	年次	記事内容(抄)
1	1196	ハリルトゥ湖にあった留守營がジュールキンに襲われた。テムジンは直ちに兵を發しケルレン河のコードエが島の七つの丘に至り彼らを捕らえた。サチャ・ベキとタイチュは妻子と逃れたが、追って行き、テレトゥ隘口で捕らえて片付けた。
		(この後の秘史の内容は他書とあまりに異なり、史書としての正確性が疑われるので略す。)

2. 考察

2.1 1196 年前後の出来事

2.1.1 トオリルの帰国

トオリルがグセウル湖まで帰ってきた時、テムジンの隆盛を知った。モンゴル部族のカンであったジョチが亡くなっており、テムジンがカンの有力候補との噂を聞いたからではなかろうか。西域諸国から帰って来た年を、集史はチンギス・カン紀三の中で 1196 年の春と記している。そして、金軍に追われたタタルを討伐した年次はチンギス・カン紀二（1168 年から 1194 年の出来事）の最後に置いているから 1194 年頃の事としているようである。だが、金史によってタタル討伐年は 1196 年として動かさないから、もしも 1196 年のタタル戦の直前に帰国したとすればケレイト衆をタタル戦に動員できるほどの力が回復できていたとは考えられない。また、金軍はモンゴリアの政治情勢を正確に把握していたはずなので、トオリルがケレイト部族の実権を握っていないのにカンと見なして王の称号を与えたとも考えられない。当然、西域からの帰国年は 1196 年よりも前であればならない。エルケ・カラの存在感は非常に薄いので、比較的容易に、3 年ほどでカン位を安定させたとすれば、帰国した年は 1193 年となる。トオリルがいつ西走したのかが分からないが、カラ・キタイ滞在約 1 年とあるので、行き帰り 1 年を加えて足かけ 3 年を考えると、1191 年、多分秋か冬に西走したとしたい。

2.1.2 グセウル湖の位置

トオリル一行はこの湖にたどり着いたときテムジンに連絡を取り迎えに来てもらった。ケルレン河より南にあって、テムジン領から行きやすく、ケレイト領からもそう遠くない位置に湖はあっただろう。テムジンがブルギ河岸から迎えに行ったと秘史にあるから、そこから南下すれば自分の勢力圏であるサーリ・ケールがある。そこからさほど遠くない所に到着したので、テムジンの噂を聞いたのだろう。湖は近くにある。しかしグセウル湖の名は現在残っていない。多くの地名と同じく後世に変えられてしまったのだろう。変えられた例としてはチェクチェル山がイフ・ツァガン・オンドル山（大白高山）に、チクルク山がバルーン・マタド山（西マタド山）になったのがある。いずれも個性的な名から、地名と形容詞だけの単純な名になっている。そのような観点で候補地を求めると、Umbiin tsagan Lake、46.69N107.92E に行き当たる。このウンビ（地名？）の白湖という湖名も名を変えられた例のように見えるので、ここがグセウル湖だったとしたい。

図 1 ウンビイン・ツァガン湖、グセウル湖候補地



2.1.3 トオリルのカン復帰へのテムジンの協力

トオリルから連絡があったとき、テムジンは部族の有力者の一人で、カンの候補だった。父イエスゲイに続いて自分もトオリルを援助する立場になったことの不思議さを思っただろう。そして、父はその成功により勢力を大きくしたから、自分もトオリルをカン位に復帰させようと考えただろう。次期のカン位に向けての大きな実績作りになるからだ。

イエスゲイがトオリルを助けた時には、その出陣の様子が秘史にあり、グル・カンが逃亡したことは四書にある。一方、テムジンの軍事行動の記録は1196年から急に増え、その前が無い。だが、軍を率いることに未経験でカンに選ばれたとは考えられない。必ず将として戦いを指揮した経験があったはずだ。そのような目で見ていくと秘史177節に目がとまる。テムジンがトオリルを迎え入れた翌年に、メルキトをムルチェ河で破って、そこから得た家畜や財物をトオリルに与えたとある。内容は、他の三書で、ムナチャ山でトクトアと戦ったとある記事に対応している。その結果、オン・カンにやや衆が集まったと元史と親征録にある。時期は、1196年の後に書かれているから、その後のようである。だが、1196年にはカンの地位を固めていたと判断しているので、1197年以降のこととしてはおかしい。帰国の翌年の1194年の事とすれば妥当である。

2.1.4 ジャア・カンボとの関係

項目2について、元史と親征録は一致しているので、集史の内容は誤りと判断する。三国を経て帰ってきたトオリルの記事の前に、ジャア・カンボが来帰したとされている。テムジンに助けを求めたのを、後年の事から遡って来帰と書いているのだろう。

彼がいたというテルストの野またはテルストの狭間はウランバートルからダルハンに向かう途中にあるようである(1)。地形から考えると、図1の白丸で囲んだ位置ではなかろうか。

図1 テルストの位置



こことダルハンの間の東方には鉄山があり、メルキト部族との角逐の地域であった(2)。ケレイトがその辺を支配していたが、エルケ・カラの時代に力が弱まってメルキトに奪われ、テルスト以南に退却したのだろう。その者達が敗残の衆と書かれているドンカイト以下であろう。テルストの狭

間を超えて侵入を試みるメルキトを、ジャア・カンボは押し返したいが、部族内をまとめられない。力不足なので、やむなく仲の良かったテムジンの力を借りて押し戻したのだろう。この戦いはまた別のところでも現れているように思える。後年、テムジンとオン・カンが対立した時、テムジンは詰問使を送り、ケレイトに対する自分の功績を語って難詰している。その内容の一つは、「オン・カン、あなたがナイマンに攻められて、西に行ってしまった。私は、金国との境にいたジャア・カンボを、人を遣って呼び戻した。メルキトが迫ってきたので、セチュとタイチュの二人の協力を得て、これを破った」とある。この言葉の中のメルキトとの戦いと、先に述べたメルキトとの戦いを、別のものとするのは難しい。トオリルが西走して間もなく、メルキトからの攻撃があり、ジャア・カンボの救援依頼を受けたテムジンは、ジョチ・カンの命令を受け、サチャ、タイチュと共に出勤しメルキトを破ったのだ。同じ戦いのことが、別の所に少し内容を変えて書かれていると判断する。トオリル西走を1191年とすれば、1192年の事だったのではなかろうか。

しかし、テムジンが、なぜ隣国の政争に首を突っ込むようなことをしているのだろうか。理由は、エルケ・カラが信頼できず、力がなかったからだろう。どの史書でも、彼の名は一、二回くらいしか出てこず、存在感がまるでない。20年近く国内を留守にしていたと思われるので、ナイマンが引き上げた後、部衆の信頼を得ることが出来ず、ケレイト部族内の権力掌握はできなかつたと思えない。無主状態に近いケレイト部族にナイマン部族の力が及べば、隣接するモンゴル部族にも悪影響が及ぶ。ケレイトの安定が、モンゴル部族にとっても重大案件であったのだろう。テムジンはジャア・カンボと数年間共に暮らしたことがある仲なので、その人間性、能力はよく知っている。トオリルの居ない間は、彼に部族の面倒を見てもらえれば、と考えたのだろう。勿論、その考えと行動は全て、モンゴル部族のカンであったジョチの承認の元に行われていた。ただ、分からないのが、ジャア・カンボがなぜ金国国境近くにいたかと言うことである。後年トオリルと不仲になるから、その目は早くから芽生えていたのかも知れない。

1196年にジュルキン氏族のセチュとタイチュはテルストに逃げた。以前の戦いで土地勘があり、メルキトへ逃亡しようとしていたように思える。が、テムジンの通報を受けていたケレイトに足止めされたのだろう。数ヶ月後にそこで討ち取られた。

以上のように、ジャア・カンボと共にいったメルキト戦、トオリルとムナチャ山で行ったメルキト戦、これら二つが続けざまに起きるのは不自然である。後段の文章に引きずられて、二つの戦いが1196年以降のことのよう配置されてしまったと思われる。

ジャア・カンボはトオリルがいない間、部族内をなんとかまとめていたと思われる。トオリルとは同母弟なので、帰ってきたと聞いて、その復帰を受け入れたのだろう。ケレイト部族の権力移譲を見ていると、王室の中だけでの権力争い、即ち宮廷クーデターのように思われてならない。しかしジャア・カンボは数年後、オン・カンへの不満を口に出さずにはおられなかった。それがオン・カンに漏れて辱めを受けたがオン・カンは彼を殺さなかった。同母弟の縁もあるが、自分が居ない間、モンゴルの力を借りてでも、ケレイトを守っていた実績を無視できなかったのだろう。その時彼がナイマンに逃げたのはエルケ・カラとの縁でもあったのであろうか。ただ、このエルケ・カラがどうなったのか、さっぱり分からない。また、ナイマンに逃げていたのであろうか。

2.2 1996年前後の出来事の再構成

ジョチ死去の後、誰を次期のカンとすべきなのかについて、部族内で活発な動きがあったはずだ。恐らくテムジンとサチャ・ベキの二人が候補だった。テムジンはケレイト部族関係で実績を作っていた。サチャ・ベキは東方でタタルや金軍との間の活動で実績があったように思われる。テムジンの成功を見て、サチャは1195年、タタル部族や金軍との付き合いの中で存在感を示そうとしたようだ。だが評価はテムジンの方が圧倒的に大きかった。人間性が良く、前のカンであったジョチに可愛がられていたということも大きかっただろう。部族の首領達はテムジンをカンに選んだ。キヤト氏族の本家筋にあたるジュルキン氏族には不満が残っただろう。そこにタタルの一派が金軍に追われて逃げて来た。ジュルキン氏族がテムジンの出動要請を拒否したのには、逃げてきたメグジン・セウルトと、東方で何らかの協力関係があったことをうかがわせる。そうでないと、腹いせのようにテムジンの留守営を襲うはずがない。ナイマン部族の行動のように見せかけたが、テムジン陣営にはジュルキン氏族の仕業と見通されていた。金軍はタタルを討ったテムジンとトオリルの協力に感謝してトオリルに王の称号を与えた。テムジンにジャウト・クリという多分将軍級の位を与えたのは、モンゴル部族の半数のカンであるし、ひょっとしたら、金軍にはなじみであったサチャ・ベキをテムジンが動員できていないので、その立場はまだ不安定とみなしたのかも知れない。トオリルを助けたテムジンの称号が下で、助けられた方の称号が上なのだから皮肉なものであり、テムジンはジャウト・クリの名を終生恥ずかしく思っていたようだ。トオリルは数年前の惨めな境遇を考えればその称号の持つ意味がうれしくてしょうがなかつただろう。オン・カンと呼ばせた気持ちが良く理解できる。

以上の考察を元に年表を作成した。

表 2-2 (年齢はテムジンの年齢)

年次		記事内容(抄)
1191 冬	31 歳	トオリルはエルケ・カラに国を追われ、カラ・キタイに援助を求めに行った。
1192 春	32	金国国境近くにいたジャア・カンボを帰国させた。
1192 冬	32	ジャア・カンボは、侵攻してきたメルキトの攻勢を防ぐために、テムジンに援助を求めた。テムジンはジュルキン氏族と共に出動し、撃退した。
1192～ 1193	32～33	モンゴル部族のカンであったジョチ死す。
1193 春		トオリルは三国を経て、困窮した状態でグセウル湖まで帰って来た。テムジンは彼を迎えに行き自分の陣営に入れて援助し、その冬を過ごした。
1194 秋	33	テムジンはトオリル、ジャア・カンボと共にムルチェ河にメルキト部族のトクトアと戦って勝ち、ケレイトの旧領を回復した。奪った資財をオン・カンに与えた。このお陰でトオリルに衆が集まった。

1195		トオリルはケレイト部族のカンの地位を安定なものとした。
1196 春	35	テムジンに推挙された。
1196 春		金軍に追われたタタル部族の一派をトオリルと共にウルジャ河に討った。 テムジンはジャウト・クリ、トオリルは王の称号が与えられた。
1196 春～夏		テムジンの留守營を、ナイマンに変装して襲ったジュルキン氏族を下した。 セチェとタイチュは逃れた。
1196 秋		ジャア・カンボと共に、逃亡したジュルキン氏族を攻め、セチェとタイチュをテルストの狭間で殺した。
1196 秋		テムジン、オン・カン二人は、トーラ河で父子の契りを交わした。
1197?	37	オン・カンは戦力が充実したので、テムジンに告げずメルキトを攻め、トクトア・ベキをバルグジンに追いやった。資財家畜を奪ったがテムジンには何も与えなかった。

4. 参考文献

<史料>

『元朝秘史』無名氏：小沢重男(1995)「元朝秘史全訳、上、下」風間書房、東京

：村上正二(1970)「モンゴル秘史1, 2, 3」平凡社、東京

『集史』：『史集』(1983)、商務印書館、北京

：ドーソン著、佐口透訳(1968)「モンゴル帝国史1」平凡社、東京

『元史』宋濂編：「元史」(1976)中華書局、北京

『元聖武親征録』無名氏：何秋濤校注、文求堂蔵版(1910)、国立国会図書館近代デジタルライブラリー

<参考資料>

(1) 白石典之(2001)「チンギス・カンの考古学」68-71頁、同成舎、東京

(2) 村上正二(1970)「モンゴル秘史2」29頁、平凡社、東京

改訂履歴

2020年5月5日 初版

2020年7月14日 改訂1版

以上

